

被災地で積極的な活動をしている京都府立桂高校(京都府)、被害の教訓を後世に伝えるために活動をしているEPO東北(宮城県)より寄稿をもらいました。

## ユースのみなさんへ

東日本大震災から5年

# ～私たちは何を伝えていくべきか～

EPO東北(東北環境パートナーシップオフィス)

井上郡康

人の世に多くの事を問いかけた東日本大震災。あれから5年が経ちました。

沿岸部は津波に襲われ、直接津波被害を受けなかった都市部でもライフラインの停止や食糧不足に苦しみました。

仙台市にオフィスを構えるEPO東北も例外では無く、この混乱した非常時に「一体何をすべきなのか?」の問いを投げかけ続けていました。



南光台(仙台市)震災後の露店販売の様子

そんな中、EPO東北では発災から一か月が経たないうちに「3.11あの時」と題する取材活動をスタートさせました。この「3.11あの時」取材は、環境分野のNPOや行政、学校関係者等の方々が、どの様に被災し、どの様に乗り越え、何を感じているかを記録として残すことが目的です。取材は3年間で102名の方々に取材しています。

取材を通して、我々EPO東北は東日本大震災から多くの学びに触れる事になります。例えばこの大震災で広範囲にライフラインが停止した時、都心部では暖を取る事や水の確保も難しく、食料を得る為に多くの方がスーパーなどの量販店に並びました。一方で、昔ながらの生活が残っている農村部などでは、電気に頼らない薪ストーブやカマド、食料備蓄があり、都心部ほどは困っていませんでした。便利といわれている生活は、緊急時には非常に弱く、昔ながらの生活は緊急時にも強いと言えます。はたして効率性利便性を追求める事が本当に良い事なのか疑問さえ湧いてきます。またもう一つ印象深かったキーワードは「地域の伝承・地名」、正しく先人が残した智慧です。震災前までは、それほど認識されていなかった伝承や地名が、今回の大震災で多くの事が検証されています。例えば仙台平野にある「波分(なみわけ)神社」と呼ばれる神社は、西暦869年に起きた貞観(じょうがん)地震で津波がここまで来たという警告を伝えるためにつくられたものだとされていますし、地名についても津波をはじめとする自然災害への注意を促すものが多く存在しています。そのような話を聞くと、先人たちが私たち子孫に何かを残そうという気持ちに感動さえ覚えます。我々EPO東北もそうありたいと思います。

震災を経験して、震災の取材活動に取り組んで



きた人間として、「震災から得た教訓・先人からの教訓」と「今ここに生きた人はどのような気持ちでどのように生きて来たのか」ということを記していくことが大切なのだと考えています。

東日本大震災では15,894名(警察庁広報資料H28.2.10)の方が亡くなり、5年が経とうとしている今でも2,562名(同資料)の方の行方が分かっていません。これだけの被害を出して得た教訓を、被害にあわれた方たちの為にも、忘れることなく後世に伝え残していく事が、この時代を生きた人間の責務だと考えています。私たちが居なくなった時に、後の人たちは何かを感じ取ってくれることを信じています。



「3.11あの時」ヒヤリング風景

## EPO東北(東北環境パートナーシップオフィス)とは



**EPO TOHOKU**  
東北環境パートナーシップオフィス  
Environmental Partnership Office Tohoku

EPO東北は、2010年度4月1日から環境省東北地方環境事務所と公益財団法人みやぎ・環境とくらし・ネットワーク(MELON)が協働して運営しています。

EPO東北は、東北地域の環境活動を促進するために、人と人をつなぐ拠点となることを目的としています。持続可能な社会を目指したよりよい環境活動を進めるためには、行政や企業、市民、団体など、さまざまな分野の人や組織が垣根を越えて協力していくことが重要です。そこで、地域の環境情報を発信し、それぞれが交流する機会を提供することで、活動の広がりや新たな取り組み創出のきっかけ作りを担います。たくさんの方がEPO東北をきっかけにして出会い、新たな環境活動の環が広がるよう、皆さんのパートナーシップ作りを支援します。

<問合せ先> EPO東北(東北環境パートナーシップオフィス)

TEL : 022-290-7179 E-mail : info@epo-tohoku.jp URL : http://www.epo-tohoku.jp/